

現代社会と寺院の関係の再構築

学籍番号 12992018 番

氏名 井本 弥生

担当 立木 茂雄教授

目次

1 序論

- 1.1 はじめに
- 1.2 伝統仏教教団についての概念
- 1.3 本研究の目的

2 方法

- 2.1 調査するにあたり
- 2.2 聞き取りの対象・実施

3 結果と考察

- 3.1 仏教に対する意識の希薄化
- 3.2 寺院・僧侶に対するイメージダウン
- 3.3 寺院活動の限界

4 最後に

1 序論

1.1 はじめに

日本にどれだけの宗教団体が存在するか知ることは、簡単なことではない。「神社や寺院あるいはキリスト教の教会といった社会的に認知された教団をはじめ、占い師や霊能者までも含めると膨大な数にのぼる。」(石井研士 1997: 101) 森岡清美によれば、宗教団体の定義として、一般的には宗教活動を行う集団のことである。宗教集団には、教儀、儀礼行事、信者、施設の4つの要件が必要とされる。そうした宗教集団の内部に地位や役割の分化が生じ、体系が作り出されて組織化されると宗教団体と呼ばれるようになる(森岡 1973)。「宗教団体、宗教法人は“神道系”“仏教系”“キリスト教系”“その他の宗教”の4つの系統に分類されている。これらは、伝統教団と新宗教団体に分類でき、伝統宗教が歴史的経緯や組織に関して概要を把握するのが比較的容易であるのに対して、新宗教は短期間に発生展開をした団体である。」(石井 1997: 115)「伝統宗教における仏教系には13宗(奈良仏教系 法相宗・華嚴宗・律宗、天台系 天台宗、真言系 真言宗、浄土系 融通念仏・浄土宗・浄土真宗・時宗、禅系 曹洞宗・臨済宗・黄檗宗、日蓮系 日蓮宗)ある。このうち檀家制度をもっていて寺院に所属している日本人の大部分が菩提寺としている寺院は天台宗以下の宗派である。なかでも、依然として寺院数・信徒数からみて、社会的に大きく活動しているのは天台宗・真言宗・浄土宗・臨済宗・浄土真宗・曹洞宗・真宗・日蓮宗の7宗である。」(藤井正雄 2001: 235)本研究では主に浄土宗に焦点をおいている。

1.2 伝統仏教教団についての概念

「1945(昭和20)年8月、日本は連合国に無条件降伏した。アメリカを中心とする連合国軍による占領政策の当初の目的は、日本の軍国主義的要素を排除し、民主化をすすめる点にあった。民衆への弾圧法規であった治安維持法・宗教団体法は廃止され、日本の宗教は国家神道から制度的に解放された。この年の末に宗教法人令が公布され、届け出をすれば、自由な意志に基づいて新たに宗教法人を設立できるようになった。翌1946(昭和21)年1月、天皇は年頭勅書で『人間宣言』を行った。天皇は神ではなくなり、国家神道の中枢装置は自己破壊したことになる。同年11月、新憲法が公布され、信教の自由が法制度面で確立された。こうして諸宗教は、国家の制約を受けずに自由な活動ができるようになった。1939(昭和41)年に13宗28派に縮小統合されていた仏教教団は、1947(昭和22)年には36宗47派にふくれあがった。だが、それはみせかけの膨張であり、伝統仏教教団は農地改革で打撃を受けたのである。ことに、農村部の寺院に与えた影響は大きく、寺院経済は窮乏した。さらに家制度を基盤としていた檀家制度は、旧民法の廃止にともない揺れ動き、寺院経済を圧迫するに至った。僧侶のなかには、寺院収入だけで生活できないものが出だし、寺院の外に職場を求めた。これが、兼業

住職の増加である。(梅原正紀 1998: 165)

高度経済成長期に入り、都市部への人口移動で都市の寺院経済は好転する。これといった布教活動もしないのに宗教法人法によって税制面で優遇されていることも相乗して、富裕化した寺院もある。その反面、過疎地域の寺院経済はますます窮迫化し、無住の寺院も出だしている。経済面での寺院格差は深まりつつあるのが現状である。

このことから、梅原は寺院の抱える問題への対応として次のようにみている。

寺院にのしかかっている問題のなかで対応を迫られているのは、江戸時代以来、信仰抜きで人びとを寺と結びつけてきた檀家制度である。葬儀・法要や墓によって檀信徒とつながるのではなく、信仰によって結び合わなければ伝統仏教教団はますます形骸化し、崩壊の一途をたどることになる。(梅原 1998: 165)

梅原は続けてこう述べる。

寺院経済が豊かな都市部の寺院でも、仏教の原点から見直すと、その大半はすでに形だけのものと化しつつある。たとえば、葬儀・法要に際しても、僧侶の側に信仰心というものは感じられない。焼香の順番や進行手順だけが葬儀の秩序を支えている。こうした状況が続く限り、時代に即応していくことは難しい。

敗戦後、信教の自由が法制度的に確立され、急速に伸張したのは新宗教教団である。新宗教教団の主流を占めるのは法華・日蓮系の創価学会・立正佼成会・霊友会などである。伝統仏教教団側は、護教的立場から新宗教教団をレベルの低い宗教集団とみなし、新宗教教団が発展するのはなりふり構わず現世利益をセールス・ポイントにしているからだといった分析をしていた。

だが、事態は逆転しつつある。家制度の解体にともない、信仰は家で決められるのではなく個人が選びとる時代になってきているのである。檀家制度という政治権力によって作りだされた特権を持たない新宗教教団は、ゼロから出発して育ってきた。その成果が実り、平和運動など社会生活の面で今や有力な社会勢力となっており、伝統仏教教団側は大きな打撃を受けている。そのなかには、伝統仏教教団が経営している宗門校のなかから、新宗教教団の教義の整備、あるいは教団運営の支持者として参加しているものがあるという事実もあり、その数は増えている。(梅原 1998: 166)

1.3 本研究の目的

わが国では、古来仏教が葬送儀礼と深い関わりを持ち、現在も葬祭は寺院活動の相当部分

を占めているが、近年、人々の葬祭に関する意識や態度にも変化が見られ、ひいては、従来の葬祭のあり方そのものに対するみなおしの声も高まりつつある。この背景には、仏事をめぐる営利主義や葬儀の形骸化・華美化にともなって生じる宗教心の不在感、建墓経費の高騰、さらには世帯交替による祭祀継承の困難などさまざまな要因があると考えられる。いずれにおいても、現在および将来の寺院が抱える主要な課題と深く関連しており、現状把握ならびにその分析は重要な課題であると考えられる。そこで、この研究を通して、寺院・僧侶に対しての先行するイメージを念頭に置きながら、自らの寺院・僧侶に対する認識を改善するためにも、現にその状況下にいるひとの話をもとに、問題提起し、改善策を探ろうとするものである。

2 方法

2.1 調査するにあたり

「浄土宗における一般的な伝道教化は“ 帰敬式 ”“ 念仏会 ”“ 五十相伝 ”“ 授戒 ” 等の古典儀礼を基本としたものが主と考えられる。」(藤井 2001: 243) これらは重要な教化法ではあるが、現代においては時代の変化に応じた新しい教化法を模索、考察することが必要であると考えられる。このような観点から各寺院がどのような寺院活動をしているか、その実態はどのようなものか、その際、どのようなことを感じているか、実施されるうえでの問題点、教化に関する展望を僧侶に対して聞き取りを行った。そして、その話の内容から、浮かび上がった問題点をもとに KJ 法 B 型 (資料 1) を行った。寺院の規模や置かれている環境、住職や寺族の関わりかたの違いは考慮するものとする。

2.2 聞き取りの対象・実施

浄土宗寺院	奈良教区第四組	慶運寺	溝端隆桂上人	2002 (平成 14) 年 12 月 2 日
	第九組	極楽寺	横井照典上人	2002 (平成 14) 年 12 月 6 日
	伊勢教区気和組	伊福寺	三森貫乖上人	2002 (平成 14) 年 11 月 23 日

3 結果と考察

抽出した 5 つのグループの中から、集まったカードの多いもの < 仏教に対する意識の希薄化 > < 僧侶・寺院との関係の減少 > < 寺院活動の限界 > についての考察

3.1 仏教に対する意識の希薄化

伝統のよさというものも常々認識しているが、その受け手、葬儀や法事に来ている人たちがどれだけ意味を理解したり、情緒的に満足しているか。

お葬式という儀礼も大衆にとっては、儀礼の意味や形式というものに対する事前の教化なり認識がないところにつれていかれてしまうわけである。自分はお経も知らないし、手を合わせるのをはじめてだという人が多いなか、人々にとってその雰囲気たるやお坊さんがわけのわからないお経を読んで、ただ足が痛くて待たされて、葬儀屋がワーワーやって終わり。そこに何らの感銘もなければ、理解もない。だから、若い世代の人たちはあまり良い印象を持たないのだろう。

事実、お寺に足を向けるのは、お葬式や法事のときぐらいといったひが多いのではないか。お寺は死んだら行くところと思っているひが多く、自分自身や誰かの死に直面して初めてお寺の存在を意識するようである。「仏壇のある家庭をみても、仏壇を心の中心とした家庭は少なくなっており、だんだん形骸化した片手間のものとなっている。」(板垣 1990: 131)そして、都市化の進んだ今日、多くのひとは宗教なしに生活をしている。宗教は必要ないんだ、と公然と答えるひも多くなっているようだ。板垣によれば、もともと、お寺というものは祈りの場だけではなく、医療や学問の中心地であり、公民館の役割を持ち、悩み事の相談所であった。また、行き暮れた人びとや身寄りのない人びとの安息の場所でもあった(板垣 1990)。だが、そういった認識は除々に薄れてきている。

現代人の宗教心と仏教を、秋田光彦はつぎのように特徴づけている。

仏教の危機は宗教の危機と同意ではない。森羅万象のいのちを靈性ゆたかに描いたアニメ映画“もののけ姫”が、1千万人を超える観客を集めたように、けっして日本人の宗教的な感性は衰えたわけではない。芸術や学問、日々の生活のなかでもっとも宗教的な試みが活発な時代にきている。既成の宗教の中だけに宗教が存在しているわけではない。宗教でないものの中にも宗教性豊かなものがある。現代日本人の宗教は新たな宗教心を創造しようとしているのかもしれない。(秋田 1998: 517)

秋田は、続けてこう述べる。

初詣に行くこと、おみくじをひくこと、占いをすることがそうである。従来のシステム化された宗教に与しないことで、これらが宗教であるという認識はない。既成の宗教は先祖教のなかで完結してしまっ、内なる宗教心に応える幅を持たない。信じる心はあっても、必ずしもそれが仏や神だけに向けられるものではない。長い間、人間の生

き方として交渉のなかった宗教に対する不信感か、明らかにこれまでの教義や儀式とは異なるものを求めている。新しい芽を見せる宗教心と、寺院や僧侶という既存の宗教とはほとんど接点のないまま平行線をたどっている。(秋田 1998: 517)

人間が死ぬかぎり、いわゆるお葬式、法事はなくならないからお坊さんが失業するということはないと思う。けれども、だんだんいわゆる檀家制度も変化して、お葬式をしたり、法事をすることによって寺院を維持するということが難しくなってくるだろう。都市に移住したり過疎になったりして、結局故郷から離れることが同時に先祖離れということになってしまう。祖先とか先祖という意識は急速に薄くなっている。それは、やはり血のつながり、家族、あるいは血縁というものとの問題だろう。そういう意味で寺の経済的基盤というものは、全体的にけっして安定していないと思う

「仏教というものの本質的な内容は、社会を超え、時代を超えたものではなくてはならない。」(水谷行正 1995: 29) しかし、それはただ社会の変化に対して受身でいいということではない。水谷によれば、その宗教的な真理、念仏の精神から社会に超然としていればいいということではなく、このような考え方はとても古いのであり、常に積極的に宗教的な信念、あるいは宗教的な真理から、まず自分自身と今の時代に対して切実に目を向けることが求められている(水谷 1995)。その意味で、現代・現代の人びとに浄土宗の信仰というものを、教義と儀礼の両面でわかってもらえるよう時機相応に工夫改善することが必要である。

3.2 寺院・僧侶に対するイメージダウン

「最近では通夜・葬儀での法話の減少、僧侶のカリスマ性の衰退等、疑問視されることが多くなっている。ここに、更に拍車をかけて、墓地分譲の看板を大きくだして営利に走っているお寺がでてきたり、院号の販売・お布施の価格化・水子供養の営業化など、宗教産業がはびこってきている。」(板垣隆寛 1990: 131) このようなことから、先祖を担保にとったような寺檀関係では、ますます檀信徒の心をつかむことは難しくなり、寺檀の信頼関係を築くことは容易ではない。寺院の大きな役割のひとつが、葬儀や年回を中心とした仏事祭礼であることはいうまでもない。長年の自檀関係を基礎に、ますます人口流動が大きくなっていく今後、寺院において葬祭としての仏教が発展することは想像できる。

板垣によれば、習俗的な宗教儀礼と一般国民の信仰心とは関連性に乏しい。むしろ、儀式の形骸化がいわれ、布施や戒名にまつわる金銭問題が取りざたされる場合が多い。また、宗教を信じない層は年々増加しており、少子化・高齢化が進めば寺檀の関係も薄くなっていく。制度によって保障された葬式仏教は栄えても、教化の面からみれば、状況は低迷したままである(板垣 1990)。

「かつて寺院は人々の生活にとって、祭礼の場であると同時に、教育や福祉の、また芸能の場でもあった。『寺院は地域のコミュニケーションだった』とよく言われることである。」（水谷 2000: 122）たしかに、寺院は地域の集会所であったし、寺子屋であったし相談所であった。

水谷によれば、仏教が伝来して 1500 年、長い歳月の中で、寺院は日本文化の公共的な空間としてその役割を引き継いできた。日本の仏教における布施行・利他行の実践は、もともと広義の公共文化の源流であったに違いない。聖徳太子の四福田院、空海の綜芸種智院など、ある時代まで教育・福祉・医療などに日本仏教が及ぼした影響は計り知れない。しかし、現在ほとんどの寺院にはコミュニティーセンターの機能はない。寺子屋が学校教育に取って代わられたように、近代化の制度のなかで寺院の機能は置き換えられ、固有の意味を失っていく（水谷 2000）。葬式仏教でさえ、地域や家族の変容、最近の葬送の自由化などあって、その存在感は次第に損なわれつつある。葬儀・法事が寺院活動の中心となり、他のことはあまり重要視されないようになってきており、他には何も行わない寺院もある。もちろん葬儀・法事は教化布教の大切な機会である。問題なのは、それ以外にほとんどの活動を失くなってきたことである。その結果、だんだんと檀信徒の数そのものも減ってくる。そして、寺院に対する関心も無くなってきている。「大量生産・大量消費、バブル経済を駆け抜け、現代社会は少子・高齢化が加速する。こころの時代、宗教の時代と叫ばれながら、現実はその逆転したような現象が続出し、社会はますます深刻の度合いを深めている。」（水谷 2000: 153）

坂野泰巨によれば、そのなかで、なぜお寺はあるのか、問いかけることは、混迷する現代社会において寺院のアイデンティティを求めることである。昔からそこにあったからではなく、<いまそこになくてはならない>意味を寺院はどのように主張していくのか。既存の事実から必然と創造へと考えることが、現代社会と寺院のこれからの関係を再構築することでもある（坂野 1993）。

寺院が現代社会において確かな地位を取り戻すためには、地域との関わりの中で活動していくことが必要不可欠である。いま寺院に求められていることは、地域との関係を深めて、一般の人が気軽に来ることのできるようになることだろう。

そこで、坂野は次のように考えている。

教化をする側として大事なことは熟知しておくこと。第一に相手を知ること、第二に自分を知ること、そして第三は、自分を知らせることである。

（坂野 1993: 87）

坂野は続けてこう述べる。

第一の相手を知るということは、世帯別の関心事、それから地域を知るとのこと。これらを材料に壇信徒名簿を用意し、先祖代々・家族構成を常時把握しておく、世帯別の教化など役立つのではないか。二つ目に自分を知るということは、教化者である自分、そして教化者でありながら教化をしていない自分、そういう自己分析、それからもうひとつ寺の分析が必要なのではないか。三つ目に自分を知らせるということは、余り知られていない自分、知られていない寺を知らせる。そしてそれを知らせるためには、文書伝道・法会などいろいろな方法があるだろうが、それらを考えていく。まずは教化を計画化し目標を設定して、目標との間にある障害物は何なのか選びだしてみる。そして、それを乗り越えるためにはどうするのかという対策をする。そして達成したのから評価していく。このような流れが教化活動にも必要なのではないか。(坂野 1993: 88)

地域の人を活動に巻き込んでいくことで、寺院活動に大きな幅がでてくる。寺院で行う様々な活動を、住職や寺院関係者だけで行うのではなく、檀家や地域の人に大きな役割をはたしてもらうことを常に心がけていなければならない。

どんなところでも地域社会には、優れた何かを持っている人はいる。最近では寿命が延びているにもかかわらず、60歳前後で定年退職してしまう。せっかく才能や知識があるのに、それが生かされていないというひとが地域にはたくさんいるはずだ。だから、せめて壇信徒のなかにどんな人がいるのかぐらいは知っているのが大切。そうした人たちがお寺の事業展開や教化活動に参加することは、お寺にとって大きな力になるし、地域との関係をよりよく深めることにつながるのではないか。

梅原によれば、宗教集団には3つの側面がある。1つは組織体、2つは制度体、3つは運動体である。伝統仏教教団と新宗教教団を対比した場合、伝統仏教教団に大きく欠けているのは運動体としての側面である。宗教集団にとっていちばん大事なものは、運動体として機能しているかどうかという点である。これは、具体的に信仰運動が盛んに行なわれているかどうかということである(梅原 1998)。

ただ、これも何をすればいいのかを見つけ、実行に移すのは簡単なことではない。寺院が何をすべきかを考える基本は、やはりその寺院の成り立ちである。その寺院がなぜその場所に設立されたのか、これまでどんな活動が行われてきたのか。寺子屋であったり、集会所であったり、その機能は何であれ、地域の中での位置づけが歴史的にあったはずである。それを見つめ直すことで自ずとすべきことが見えてくる。壇信徒や地域の中にいる優れた人を見つけたところからできることを考えてもいいかもしれない。住職自身の趣味や得意なこと・好きなことをきっかけに地域活動をすることもいいかもしれない。やることが決まれば、あとは住職に意識さえあれば必ず実行できる。

また、寺院が地域活動を行うことを勧めていくなかで、壇信徒教化も忘れてはならない。特に、近年多くの寺院で、壇信徒との関係が疎遠になってきている。これから 10 年 20 年が経てば、ますます疎遠になっていくだろう。寺院はこれに対して、様々な対応をしていかなければならない。今現在、それぞれの活動に真剣に取り組んでいけば、他にもたくさんすべきことが見えてくるはずである。地域との関係を大切にしながら様々な活動を行っていることも、壇信徒にとっては「うちはあるいろいろな行事をやっているお寺の檀家だ」という誇りにつながるのだと思う。活発であればあるほど、必ず壇信徒は大なり小なり寺院に関心を持つ。地域のお寺であることは、檀家の寺であること、こうしてお互い相乗効果を持っているのではないだろうか。

坂野によれば、寺院が何をすべきかを考える時、歴史的にその寺院が地域とどう関わってきたかを再認識することが大切。開山の人物像や、設立の由来、なぜこの場所にこの寺院が設立されたのか、そして、その後現在までどんな活動を続けてきたのか。改めてこれを見つめなおすことで、それぞれの寺院の特色が見えてくる。この特色を生かすことが、現在なすべき活動の基本となるのではないか。もともとほとんどの寺院は、地域と深い関わりを持っていたはずである。「地域の寺」としての寺院を創り出すことが寺院本来の姿を取り戻すことでもある（坂野 1993）。

地域への教化活動・文化活動は、寺院だけの力で行おうとするのではなく、壇信徒や地域の人々が参加し、中心となって行うべき。寺院が教化活動・文化活動を一方的に提供するのではなく、お互いができることを提供しあう、それが寺院の地域活動のあるべき姿なのだろう。そうした地域との更なる関わりが、寺院の存在価値を復活させることにもつながるのではないか。

3.3 寺院活動の限界

「日本社会第 2 次世界大戦後大きな変化を遂げた。政治的には民主化であり、経済的には産業主義であり工業化が積極的に進められた。」（石井研士 1997: 49）その結果、所得水準や衛生状態の飛躍的向上がもたらされ、物質的所有水準の向上や長寿命化が実現した。その一方で都市への人口集中、核家族化、単身世帯の増加等、従前の家を中心とした生活スタイルが大きく変化した。石井によれば、こうした経済大国化は同時に、日本人の生活についての満足感を生み出した。生活に満足しているものは満足していないものよりも宗教的である。また、経済大国化は敗戦による民族的自身の消失を回復させ、伝統の見直しは宗教の再評価へとつながった。一方、豊かな社会の到来による目標の喪失は、不安定な心理状態をもたらした。宗教的なものに近づく機会を増やしていった。だが、新しい生活スタイルは従前の社会的慣習からの束縛から解放され、多様な形態が許される自由度の高いものだが、社会的習慣の根幹となっていた伝統宗教（既成宗教）の継承を困難にしている。また、自然科学における論理的合理性に基づく成功を模範としており、知識が最も重要なものであると

いう知識偏重の社会的風潮を生み出している。この合理性を重視する風潮は既成宗教の根幹となっているそれぞれの神話的教義を否定する。しかし、人間の生活は様々な知識情報に基づく合理的な意思決定だけでは成り立たないものであり、生老病死・愛別離苦などは釈尊時代から変わらぬ<苦>であり現代においても苦であり続ける。新しい生活スタイルは新しい社会的ストレスを生み出し、根本的に満ちた現代生活において、既存宗教の伝統的な神話的教義は壊されており、過去に果たしてきたような役割は果たしていない。ただ、葬儀、墓という儀式のみが残されているだけで、<苦>を克服する力が弱体化されている（石井 1997）。

これまでになかった多様な死 環境や学校、家族など多くの文化や制度の死に直面している。「若い世代の、精神世界やヒーリングへの関心。」（水谷 2001: 116）学校や家庭でカウンセリングや心理学が日常の話題となり、厳しい競争社会を生きる企業人たちは、終わりのない自己開発に賭ける。いずれも新たな死のイメージや生命感を読み直そうとする。しかし、直接死を扱う宗教は、仏教だけでなく、現代人の生活感覚から大きく乖離している。宗教を信仰しない層は年々上昇し、宗教団体の閉鎖的な体質やカネのかかる葬儀批判はあいかわらず多い。宗教離れが加速する一方、死への関心は高まっている。このアンバランスは教義・儀式・教団という 3 つの制度によって成長してきた近代教団の行き詰まりであり、旧来の制度では合わない現代人の宗教に対する意識の現れであると読み取ることができる。

ちなみに、水谷は、つぎのようにとらえている。

現代人と宗教を考える時、「癒し」ははずせないのではないか。かつて、貧・病・争が宗教の入信動機と言われたように、近代宗教は苦に対する対症療法としての救済を目指した。病気治しの秘儀が流行り、ご利益信仰もその類型のひとつといえる。（水谷 2001: 119）

水谷は続けてこう述べる。

今日の病は、その原因を取り除けば解消するというわけではない。豊かではあるけど生きている実感が無い。なんのために生きているのか。自分の人生に到達感がなくいつも不完全な気持ちに苛まれている。多くのアダルト・チルドレンの症状がそうであるように、現代の人びとは「自分らしさの喪失」に起因している。（水谷 2001: 119）

水谷によれば、「癒し」の実現とは、けっして超越的な癒し手がいたり、奇跡にすぎたりすることではない。多様な関係性の中から個の主体を取り戻す。たとえば、いじめの問題は当事者の子ども同士仲直りさせれば解決するのではない。子どもを取り巻く学校や教師・

友人・家族などその全体を意識や社会のレベルで問いかけていかななくては本質的な問題はみえない。その全体性の回復を、“癒し”の実現というのであり、それによって自分のかけがえのなさを実感することができる（水谷 2001）。

こういった“癒し”はストレス解消法を行えば解決できるものではない。不登校の子どもを個を取り戻すために、家族療法を用いるように、たえず大きな枠組みから全体をとらえなおす視点が重要である。それは、自己との深い対話を伴うものであり、時にはこれまでにない痛みを伴う。過酷な社会システムについても深い洞察が必要となる。こういった“癒し”を拠り所とする新たな時代を仏教も受け入れていかねばならない。

寺院は世代も立場もさまざまな人たちが立ち寄り、新しい出会いを得ることのできる場である。そこで、集いのひとつとして〈幸せ〉〈家族〉〈学校〉など、いろいろな話題について語り合う。ここでの目的は、答えを導くことではなく、異なる交流から生まれる他者との出会い。そこから学ぶ自己の内面の新しい発見である。これによって、いつもとは違うもうひとつの居場所を見出すことができる。参加者同士が協力しあって築きあげたそれは、出会いから始まるそれぞれの世界づくりといえる。一方的な上下の関係ではなく、私と他者の関係をみつめながら互いの存在を認めあう。現代のシステム社会を超えた関係性のなかから、初めて主体的な個を取り戻していく。学校・会社あるいは家族、現代人の住処には出会いがない。契約的な関係はあっても自己と他者が向き合う場が少ない。そう考えると、いま生きていることをまるごと認めることのできる場づくり、仲間づくりができることが必要ではないか。

これについて現代社会における寺院が構築しうるものは決して小さくない。指示型の教化ではなく、両者が自らの立場を超えて、共感者として響きあえるような関係性を僧侶は組み直していくべきであり、人間同士が出会い、つながりあうことのできる場所を創造していくべきである。これをいかにしてできるかということに、現代の寺院と僧侶を生み変える、全体像をとらえなおす重要な示唆が秘められている。

「癒し」の実現が寺院にとって大いに有効な場面として、教育と子どもの関係があげられる。近代教育は学校制度の均質化の成功したが、今日その制度疲労がさまざまな歪みを引き起こしている。受験戦争・校内暴力・いじめ・不登校・学級崩壊等、少なくともこれら学校あるいは子どもたちにおいて起こっている問題は、学校の機構や教育の方法を変えただけで解決するものではない。

水谷によれば、〈生きる力〉と〈ゆとり〉を学校教育に取り戻し、これまでの学校教育の限界を認めつつ、〈子どもを家庭と地域に返す〉と投げかけ、従来の学校・家庭・地縁的な地域社会とは違う場を提唱して、塾やスポーツクラブだけではない、地域教育の見直しが求められているのである。

もともと教育の営みには、ひとの嘆きや叫びに応答する〈ケアリング＝いたわり〉と自然との絆を回復して心身の傷を治療する〈ヒーリング＝癒し〉の働きが埋め込まれてき

たという。“こころの教育”がさげられる現代、形にとらわれた教育から<ケアリング><ヒーリング>の教育へと大きな転換期を迎えている(水谷 2001)

寺院における営みのなかには、さまざまなひととの関わりから多様な<いのち>のありようについての学びがある。ひとの<いのち>の儚さ、危うさを通して、生命の尊さを学ぶ。教育においては、巨大な癒し手が存在するわけではない。自らの内に秘めている力を蘇らせ、癒し癒される関係を通して忘れかけているものを取り戻す。それが、<癒し>の教育といえるのではないか。

教育とは、元来あらゆる形の生命生命の中に流れている<いのち>に対する深い畏敬の念から始まった。生きているものすべては、お互いに深くつながっており、あらゆる<いのち>が全体として一つで支えあっている。<癒し>の教育こそ<いのち>との精神的な絆を創造する人間性の教育なのである。

日常のわずかな時間でも、<いのち>とのつながりに目覚め、私を取り戻すことは決して不可能なことではない。しかし、現代社会で意識的にその時間を確保することは容易なことではない。だれにとってもゆとりの時間を保証し、自らを目覚めさせることのできる場として寺院はふさわしい。伽藍の佇まい、本堂の荘厳、境内の緑と寺院には無言ではあるが、悠久の時間をかたちどる基礎が備わっている。ここに、<癒し>の教育における寺院の大切な役割を見つけることができる。その<癒し>教育の場としての寺院形成において、必要なものはさまざまなつながりが生まれる出会いである。時には予期しないものが結びつき、新たな発見を引き起こしてくれる。そして、ともになにかを作り上げる過程において、他者に学び自ら気付く。その身近な一歩として、教育の場である家庭や学校、地域をもっと身近なものにし、新たなつながりを築きあげていくことが求められているのではないだろうか。

4. 最後に

『寺院は地域のコミュニケーションだった』とよく言われるように、かつて寺院は祭礼をはじめ、教育・福祉・芸能まで、いわば庶民の生活文化の基礎を担ってきた。しかし、やがてその機能は専門分化していき、残されたお寺は先の見えない「先祖教」を余儀なくされた。

そこで、現代の寺院・僧侶には、常に積極的に宗教的な信念、あるいは宗教的な真理から、まず自分自身と今の時代に対して切実に目をむけることが求められている。そうして、現代・現代の人びとに浄土宗の信仰というものを、教義と儀礼の両面でわかってもらえるよう時機相応に工夫改善することが必要である。

まず、寺院が何をすべきかを考える基本は、やはり寺院の成り立ちである。その寺院がなぜその場所に設立されたのか、これまでどんな活動が行われてきたのか。その機能は何であれ、地域の中での位置づけが歴史的にあったはずである。それを見つめ直すことで自ずとすべき

ことが見えてくる。

そして、昔からそこにあったからではなく、<いまそこになくてはならない>意味をどのように主張していくのか。寺院が現代社会において、確かな地位を取り戻すためには、地域との関わりのなかで活動していくことが必要不可欠であり、地域との関係を深めて一般のひとが気軽に来ることのできるようになることが、現代社会と寺院のこれからの関係を再構築することでもある。そのためにも、寺院で行うさまざまな活動を、住職や寺院関係者だけで行うのではなく、檀家や地域のひとに大きな役割を果たしてもらうことを心がけるべきである。そうすることで、地域のひとを活動に巻き込んでいき、寺院活動に大きな幅がでてくるのではないか。地域との深い関わりを持っていたはずである「地域の寺」としての寺院を創り出すことが寺院本来の姿を取り戻すことにつながるのである。

これに加え、こころの大切さ、他者や自然との共生を基本理念に、力による支配に対し、人間的な信頼と相互扶助によるコミュニティーの再生を実践していくことが大切である現代社会においては、けっして押しつけの一方的な教化をするのではなく、さまざまな活動の場として参加しながら、僧侶自ら気づき、学び、実践していくことが、現代の僧侶にとっての課題ではないか。

[注]

- 1) 主観的な意見に集中するのではなく、自由奔放にアイデアや意見、または各種の調査の現場から収集された雑多な情報を 1 枚ずつ小さなカード（紙きれ）に書き込み、それらのカードの中から近い感じのするもの同士を 2,3 枚ずつ集めてグループ化していき、それらを小グループから中グループ・大グループへと組み立て図解していく。こうした作業の中からテーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出していこうとするもの。（生涯職業能力センター）グループ編成後に行う方法として、図解でまとめていく方法と直接紙きれの資料を繋いでいく方法がある。本調査では後者をとっている。
- 2) お寺を構成しているのは、まずその住職、その家族、そして檀信徒である。一言で檀信徒というが、これははまとめた言い方で、檀家（檀徒）と信徒はそれぞれ異なる意味をもつ。信徒とは、宗派の教えを信奉し、その寺院に所属する人をいい、檀徒とは、そのなかでも継続的にその寺院で仏事をいとなむものをいう。一般的には、檀家とはそのお寺にお墓を持っている家のことをいい、信徒とはそのお寺にお墓はないが、葬儀、仏事などをおまかせするひとのことをいっていることが多い。
- 3) 仏法に帰敬した者に対する呼び名。仏式をもって葬儀を行い、この式をとおして死者が受戒し、死後仏弟子となったという意味で与えられる。この最上の尊称とされるものが、院号である。

[文献]

- 石井研士,1997,『現代日本人の宗教』新曜社
板垣隆寛,1985,『布教研究所報』浄土宗布教研究所
梅原正紀,1998,『日本の仏教』現代書簡
坂野泰巨,1991,『現代の教化を求めて』
藤井正雄,2001,『仏事の基礎知識』講談社
水谷幸正,1995,『教化研究』浄土宗総合研究所

40 字 × 30 行、13 頁
原稿用紙 50 枚

図1 インタビュー親和図

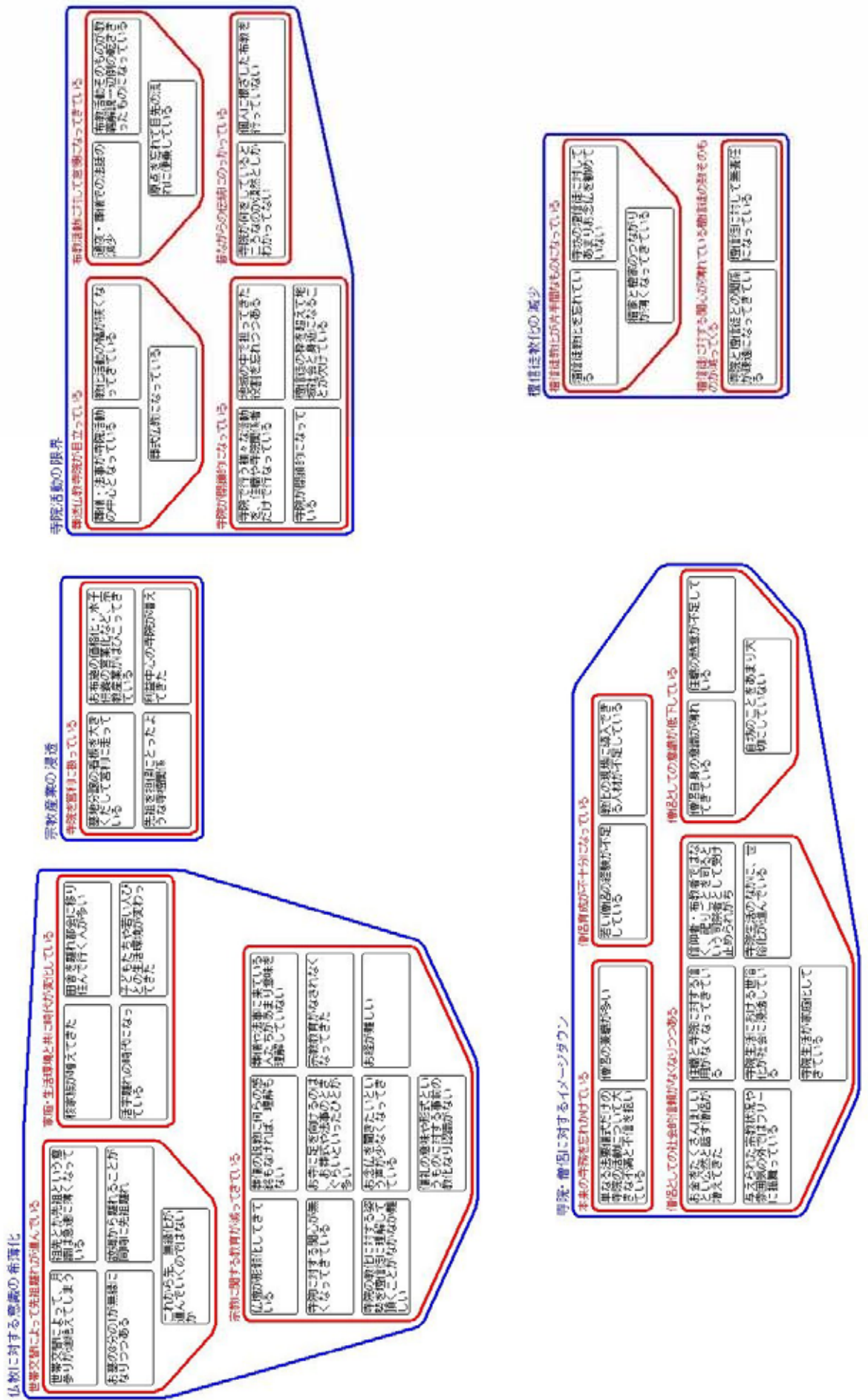


図2



図3

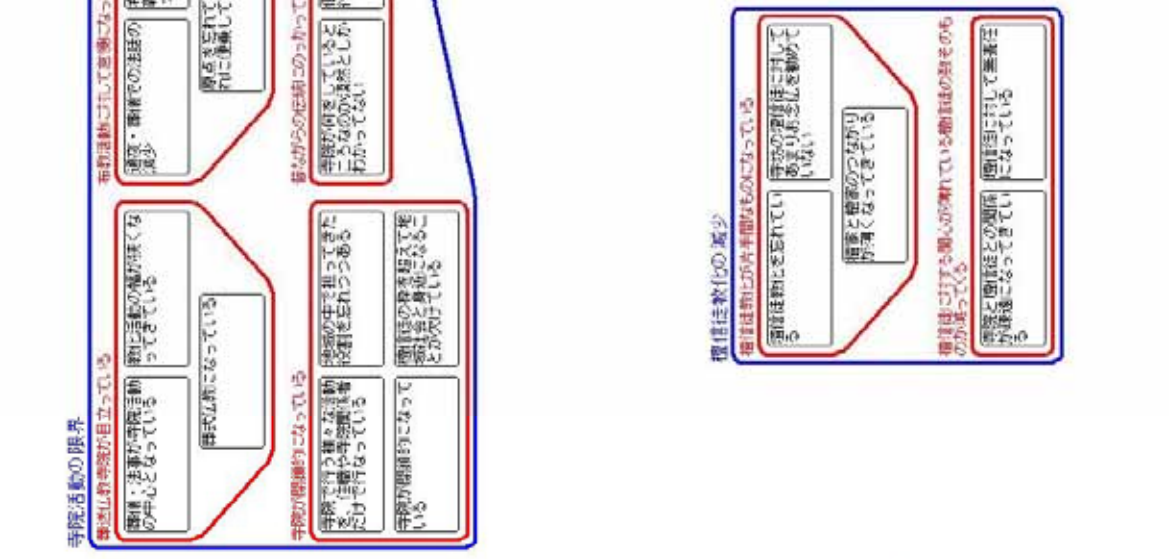


図4

